

教信寺「教信さん」のこと

加古川市野口町にはたくさんの文化財があります。

その中の一つ、教信寺の教信上人などについて少しばかりご紹介しましょう。

毎年9月には野口大念仏会が開かれます。(教信さんの法要です。)地元では「ねんぶつたん」と呼んで親しまれています。最近まで使われた小学校の社会科教科書には野口念仏が挿絵とともに載っていたのです。教信寺の広さは鎌倉時代には今の約15倍もの広さで13のお堂と48もの僧坊が立ち並ぶ大きなお寺でした。念仏会(ねんぶつえ)では「開山上人一生絵」という絵図をもとにして上人の生涯について絵解き(えとき)が行われ、また念仏踊りでにぎわいます。

教信さんの立派さは「捨身利他(しゃしんりた)」といって「自分のことよりもまず人のために」という生き方を最後までつらぬいたことです。もともと「仏教は庶民のためにある」という信念をもっていた教信さんは、なんと16歳から40年間も全国各地で阿弥陀さんの教えを説いて回りました。その頃の野口は「賀古の駅家(うまや)」を中心に人々の往来もにぎやかであったようです。西国に向かう教信さんは草深い印南野をやっと通りぬけ、ここ「野口」でひと息いれながら眺めたのが、西の空を茜色に染めるパノラマのような加古川の夕映えだったのです。教信さんにとっては、まさに壮麗な「極楽浄土の彼岸」にも思われたことでしょう。

教信さんは野口を安住の地と決め、粗末な草葺の小屋に住み、念仏を唱えながら農作業の手伝いや疲れた旅人の荷物を担いだりして布教に励んだので、「荷送り上人」とか「阿弥陀丸」と呼ばれ大層尊敬されていました。けれども自分のことは地位の低い「沙弥(しゃみ)教信」と呼んでいました。

教信さんが野口に住んで30年、86歳迎えた時、里人たちを集めて「わたしが亡くなったら、この身を飢えた鳥や獣に差し出し、救ってやってほしい」と遺言されました。そして陰暦8月15日満月の夜西方に向かって念仏を唱えながら見事な往生を遂げられました。人々は遺言にしたがひ、教信さんの亡きがらを野原に横たえ、その身を鳥獣に施し(ほどこし)たということです。

浄土真宗を開いた親鸞は「教信こそ念仏者の手本である。わたしも教信のような生き方をしたいものだ。」と言われたそうです。また、時宗という宗教を開いた一遍も、この野口を自分の臨終の地にしたいと願い同じように「わが亡骸は野に捨て鳥獣に施すべし」と遺言しています。

こうして教信さんの精神は親鸞・一遍に受け継がれ、新しい民衆救済の鎌倉仏教が生まれます。

考えてみますと日本の新しい仏教は、この播磨の国「野口」から始まったといっても、言い過ぎではないと思います。

「自分の事より、まず世のために人のため」という教信さんの生き方は、この平成の世でも色褪せることはありません。

機械がございましたら教信寺のご廟所(びょうじょ)訪ねていただき、あらためて教信さんの心にふれながら意味のある人生を考えたいものです。

野口公民館 地域学講座世話人代表 高松 武司